

平成30年度 学校自己評価（アンケートの集計と考察） 長野県稲荷山養護学校

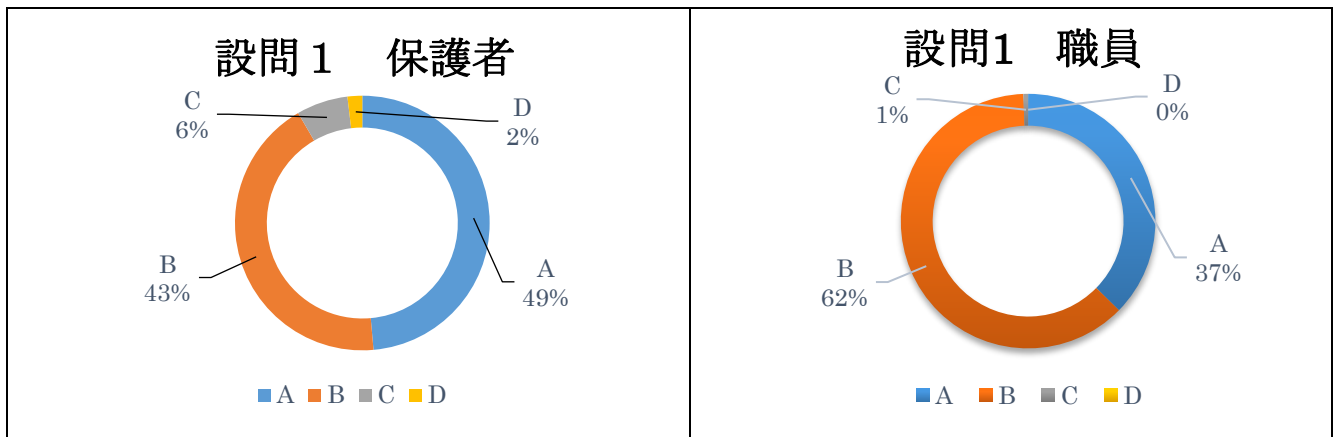
1 回収率(※人数は家庭数)

	小学部			中学部			高等部			分教室			合計		
	人数	提出	%	人数	提出	%	人数	提出	%	人数	提出	%	人数	提出	%
保護者	105	89	85	54	39	70	100	78	79	21	10	48	280	213	76
職員													174	166	95

評価基準 A：そう思う B：だいたいそう思う C：あまりそう思わない D：そう思わない

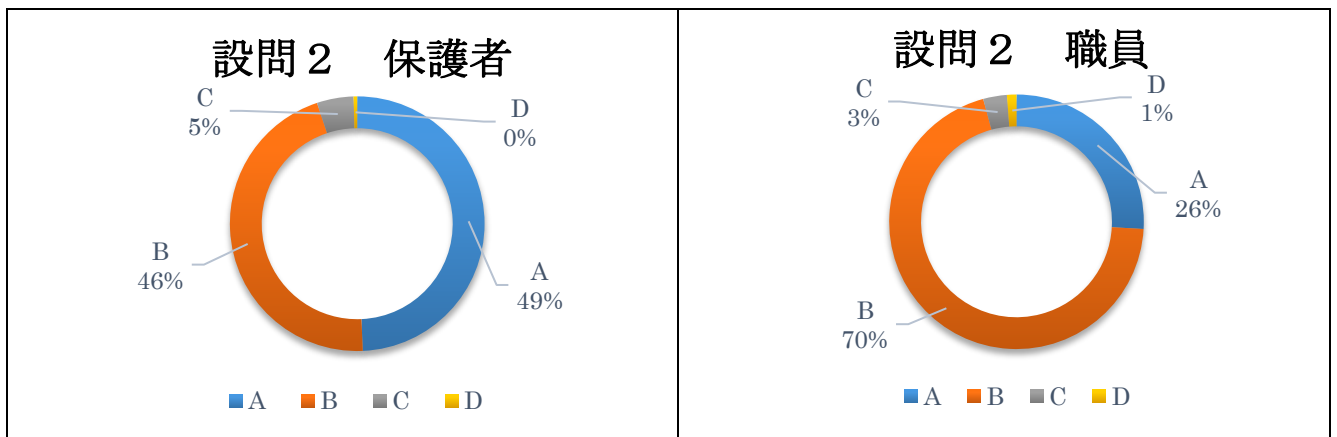
2 項目ごとの保護者・職員間比較

設問1 職員は、生活年齢や障がい特性に配慮し、特別支援教育の専門性を生かした教育を行おうと努力していると思いますか。



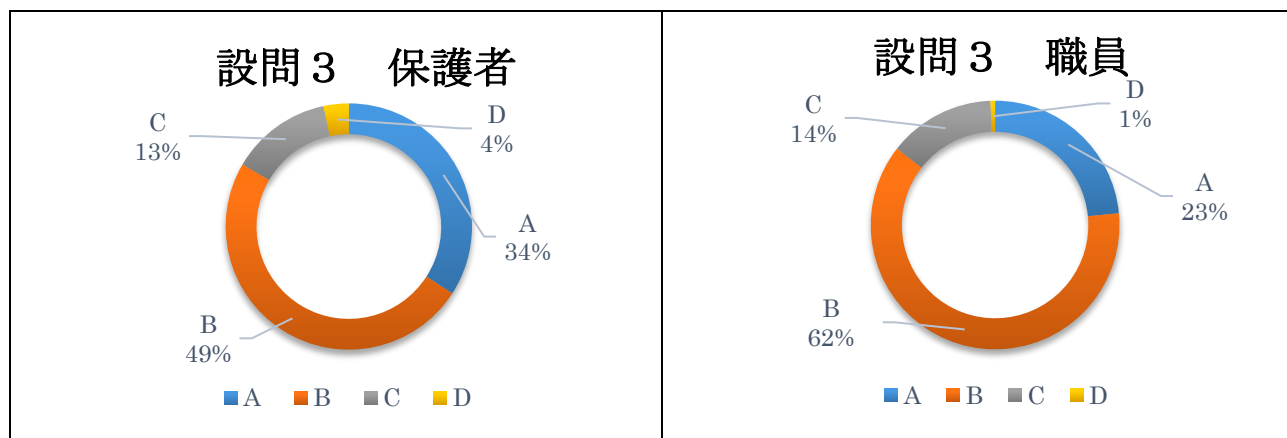
職員・保護者共に A・B 評価が90%を超えました。職員は自主研修会やグループ研修、セミナーや事例研究会など特別支援教育に係る専門性維持向上に努めています。一方で保護者から C・D 評価が併せて8%に及ぶことは重く受け止めます。子どもの人権を大切にしたい呼称や声のかけ方、誘導の仕方等にご意見もいただきました。また、教育課程編成、教育内容に係る意見・要望もいただきました。一人一人の子どもの特性をふまえた適切な指導・支援のため、これらの意見を真摯に受け止め改善策に活かしてまいります。

設問2 学校は、個別の指導計画を作成し、それに基づいて適切な指導、支援をしていると思いますか。



職員・保護者共に90%以上の評価でした。しかしながら、職員の A が26%、B が70%という結果は、改善を模索したい方向性を含んだ「概ね」と推測できます。個別の指導計画が実際の指導や支援に活かされていない、前年度から変わっていないとの指摘もありました。お子さんの教育的ニーズの具現を全て網羅しようとする計画は内容が過重になり、願いや支援の方向が焦点化されません。1年間での具現を意識した重点的・焦点的な目標を保護者と一緒に設定して、日々の実践に活かしていきたいと考えます。

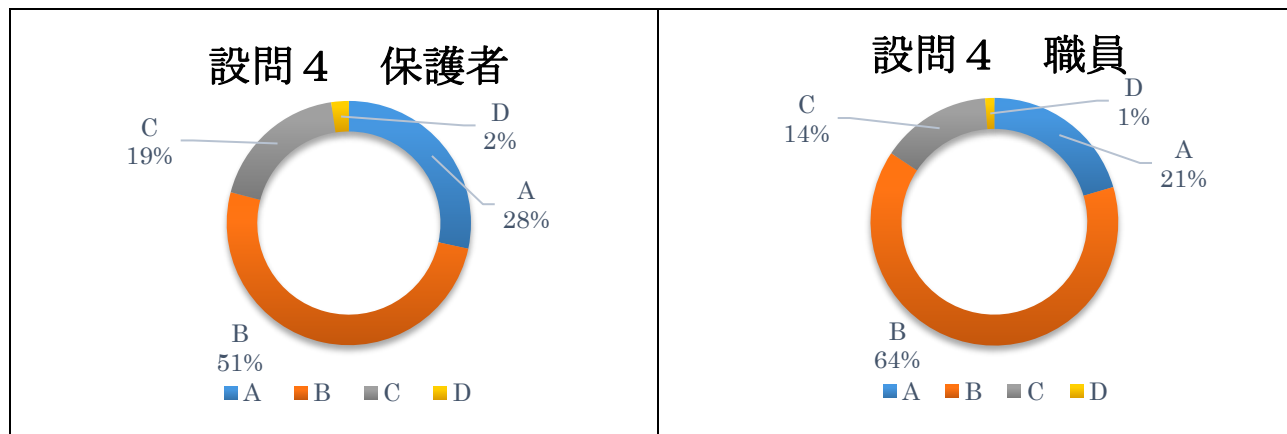
設問3 学校は、前年度の学級や学部からの引き継ぎが適切になされ、連携した指導、支援を行っていると思いますか。



A・B合わせた評価が80%半ばとの結果でした。お子さんの支援に係る引き継ぎに課題を感じている保護者、職員が少なくありません。特に支援の継続性・連続性といった観点において、保護者からは「前年度から引き継がれていない」、「担当が毎年かわって心配」、「職員間の連携がとれていない」、教員・保護者共通の意見として、「部間での引き継ぎに課題がある」といった意見が寄せられました。

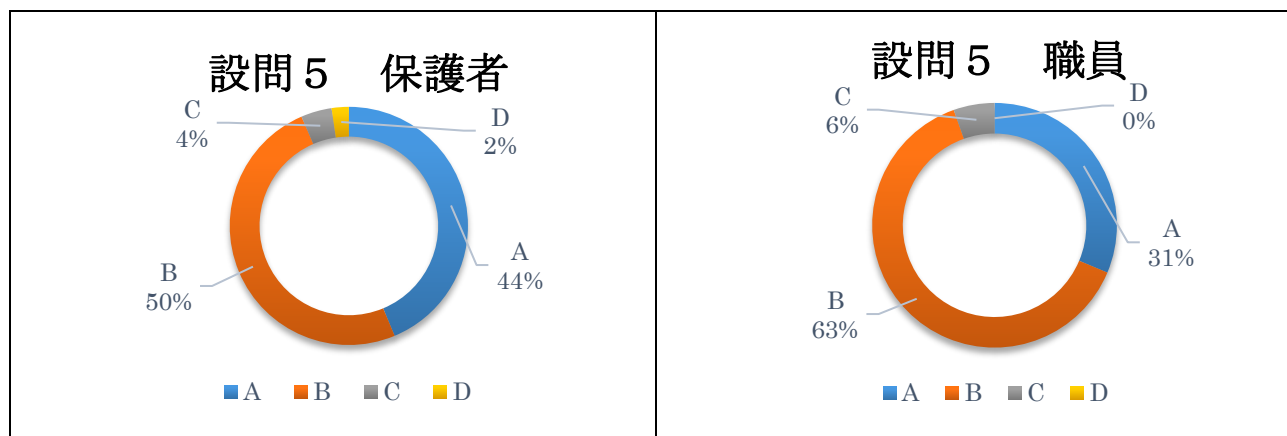
日常的に児童生徒についての情報交換はもちろん、学年や部を超えた情報や支援の引き継ぎをいっそう大切にして参ります。

設問4 学校は、家庭・地域・関係機関（市町村の福祉関係機関、支援センター、ハローワーク、医療機関、児童相談所等）と有意義な連携を行っていると思いますか。



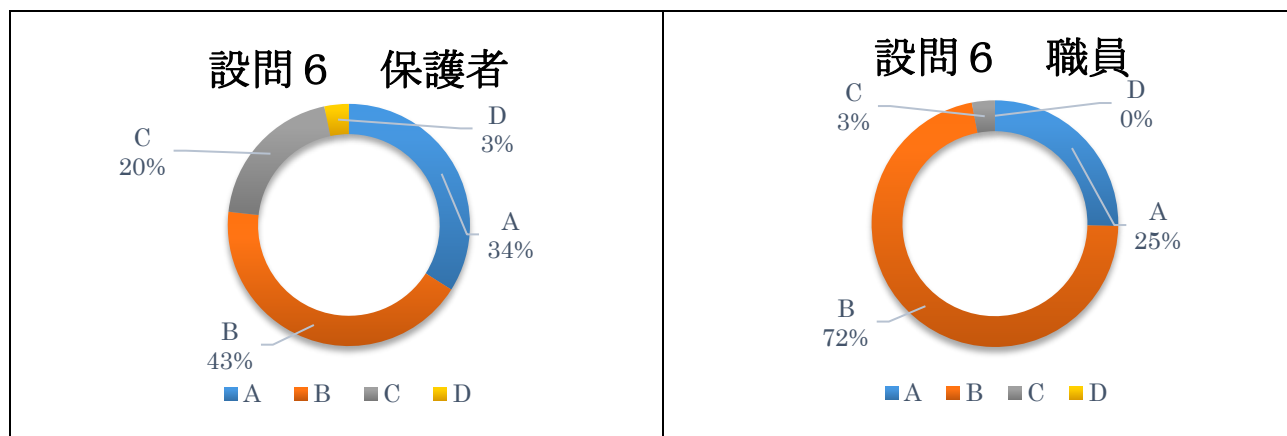
保護者のA・B評価が合わせて80%以下でした。諸機関との連携への期待やニーズの高さに対して、支援会議だけでは十分な対応を実現することには難しさもあります。個々のニーズや連携の状況に合わせ、状況を確認に確認したうえで、参加者のそれぞれが課題をつかんだり方向性を認識したりし、何かしらの改善や成果を上げられる支援会議を大切にして参ります。

設問5 児童生徒は、学校生活を通してその子なりに基本的な生活習慣（あいさつ、身辺自立、性にかんすること等）が育っていると思いますか。



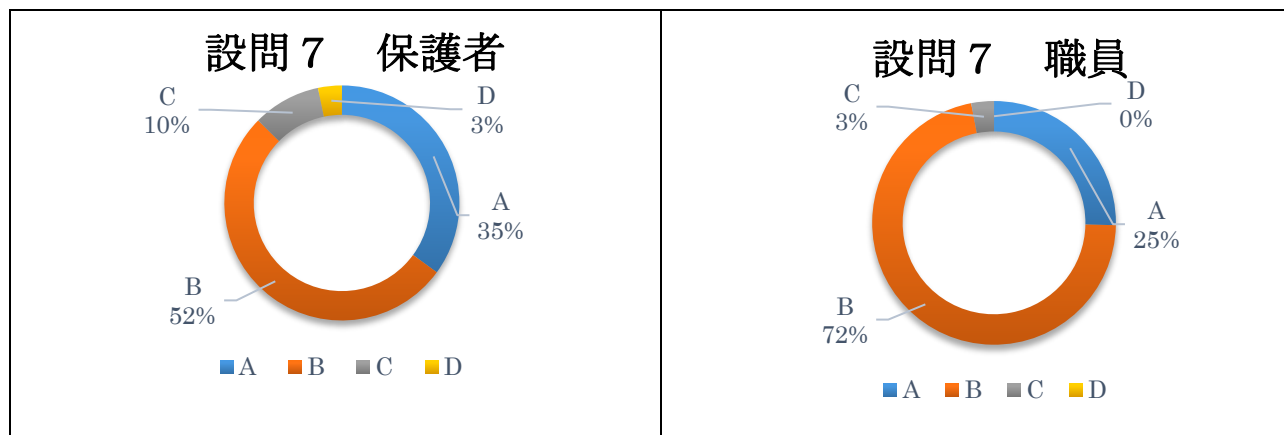
職員・保護者共にA・B評価が90%を超えています。保護者からのA評価が40%を超えていることは、職員の自信にも繋がります。しかしながら保護者の半数、職員の63%がB評価であることも事実で、子どもの育ちに実感が伴っているかという、「だいたい」という言葉の中に吸収されてしまっているのかも知れません。一人一人の状況やニーズに照らして、どの場面でどのような力が身についたのか具体的に説明できる学校でありたいと考えます。これが、保護者と一緒に子どもの成長を共感できるような支援につながると考えます。家庭だけでなく、職員も児童生徒にとって共同生活者であるとの一面も再認識しながら、学校生活全般を通して子どもたちの基本的な生活習慣の育ちを支えていきます。

設問6 学校や家庭における悩みなどを気軽に相談できる体制が整っていると思いますか。



職員は90%以上が相談体制が整っていると評価していますが、保護者は80%を下回っています。「先生方は忙しくて気軽に相談できない」「懇談の時間がもう少し長く欲しい」「どう相談したらいいかわからない」「問題の結果だけを連絡されてもどうすることもできない」などの指摘が10%の差に表れています。懇談会や支援会議だけでなく、日常的に気軽に相談できる関係をいっそう大切にして子どもの情報共有をおこない、家庭と学校が足並みをそろえていることが、子どもの成長に寄与するはずで、3カ年連続して保護者、職員ともにA評価が減少傾向にあることを受け止め、相互良好な関係を築き、維持する努力が不可欠です。

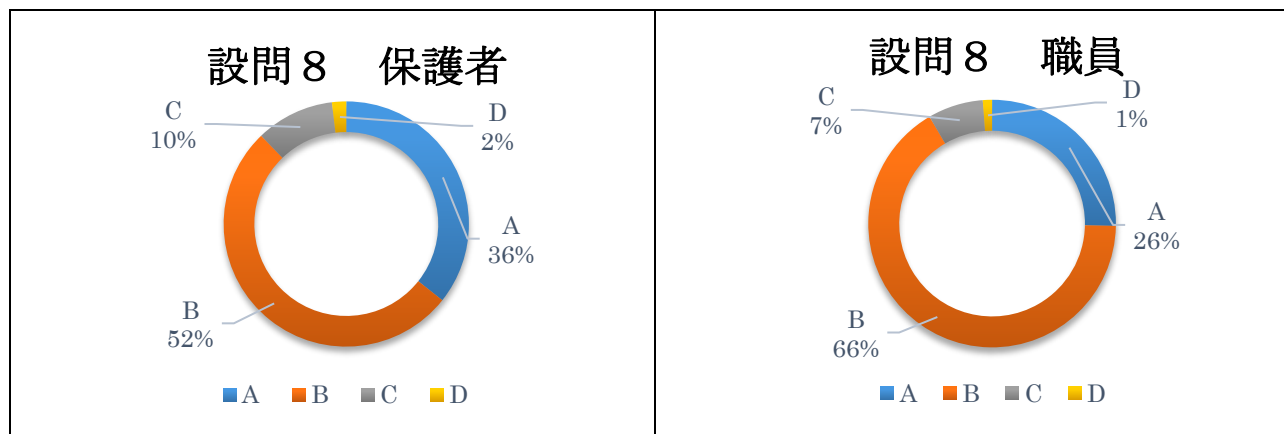
設問 7 交流や宿泊行事、校外学習は、児童生徒の実態にあったものになっていると思いますか。



職員、保護者共に A・B 評価が 90% 近くという評価でした。一方で学年内の子どもの実態や行動様式の幅が多様になり、全ての子どもに合わせた計画を立てにくいとか、活動が平均化されてしまっていることへの指摘もありました。30年度高等部では教育課程に対応して3回の修学旅行(進学コース、総合・生活コース、分教室)を実施しました。また、31年度はそよかぜは独自の修学旅行を計画しています。

保護者から多様な経験を期待する校外学習をより多く求める意見もあることも受け止めつつ、教育課程全体の中での位置づけを考慮した上で行事の精選も必要です。一人一人の子どもたちにとって意味のある行事、校外学習を計画実施していきます。

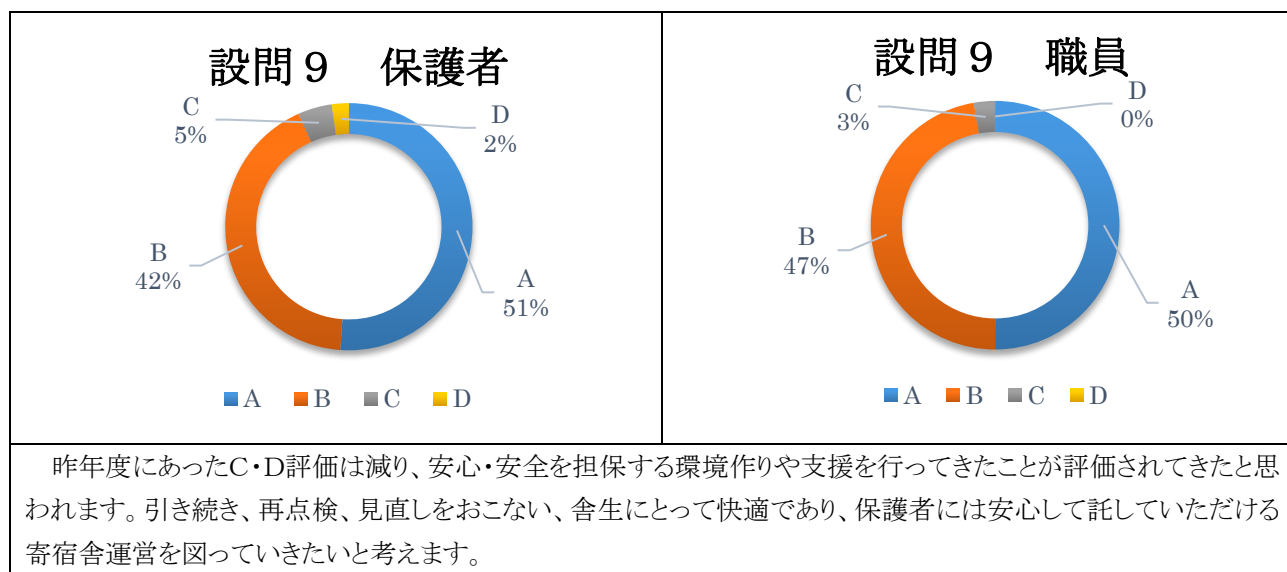
設問 8 学習環境（学校の施設・設備、教室環境など）は、児童生徒にとって生活しやすいものになっていると思いますか。



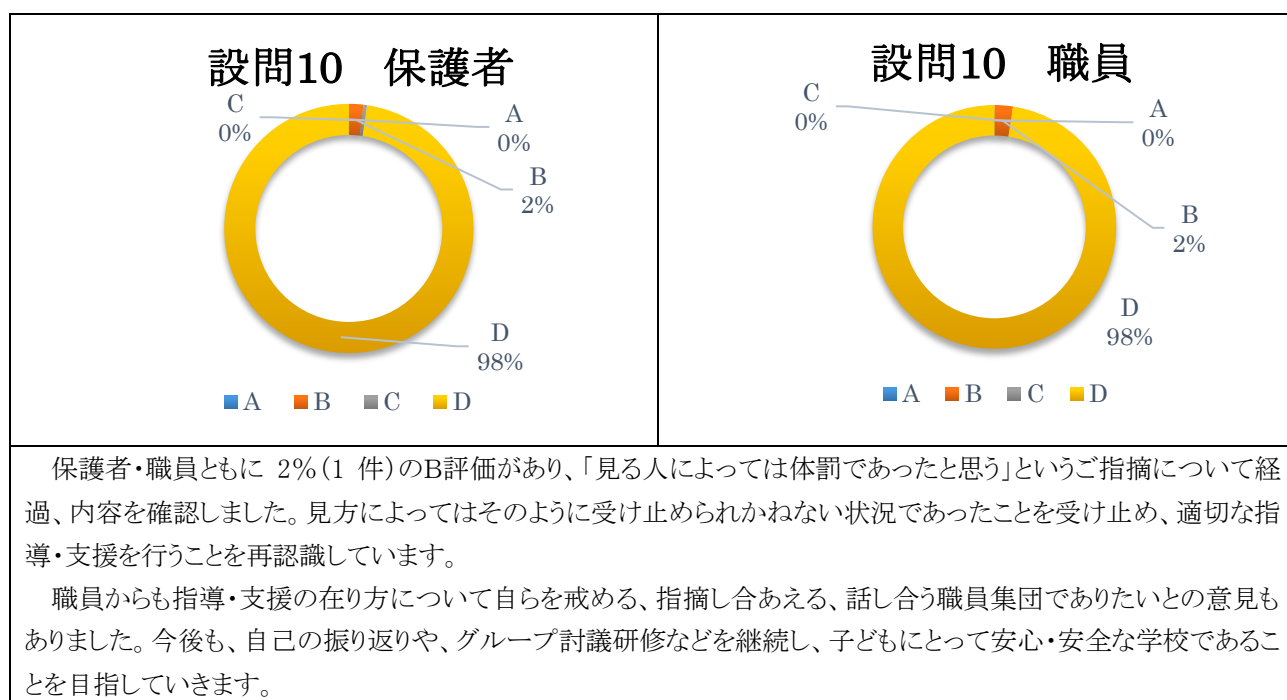
普通教室のエアコンは平成 28 年度で整備完了しています。更級分教室の教室へのエアコンも、今年度末の設置予定です。作業室やホール・プレイルームの室温管理も対策が必要であり、今後の課題です。

保護者の 10% を超える C・D 評価のなかに、夏冬ともに教室と廊下との大きな寒暖差の心配、また、児童生徒の増加やニーズに合わせての教室不足、机・椅子の整備、中庭に遊具の整備を求める意見がありました。今年度グラウンド周りの排水路の蓋を安全なコンクリート、金属製へ交換工事をしました。今後も校舎の修繕も含め、施設設備の整備を計画的に進めていきます。

設問9 寄宿舍では、舎生にとって安心安全な環境を整えたり、暖かい支援が行われたりしていると思いますか。



設問10 今年度、あなたのお子さんが体罰をされたということを見たり聞いたりしたことはありますか。



3年間の比較

